は、此火打袋にくすりをも入て持也、

〔公方樣正月御事始之記〕一刀を人に遣候時、自然火打袋をさげ申候時は、取候て懷中仕候て、さて可出候、袋共に遣事不可有之、

〔源平盛衰記十六〕圓滿院大輔登山事

圓滿院ノ大輔ハ、宇治ノ軍ヲ脫出テ、略中ツク〳〵物ヲ案ズレバ、山僧ノ心替ヨリ角成ヌト、不安思ヘリ、略中速ニ登山シテ堂舍佛閣悉魔滅ノ煙トナサバヤト、大惡心ヲ發シ、燧附茸硫黃ナド用意シテ、燧袋ニシツラヒ入、形ヲ修行者法師ニ造成シテ、山門ヘコソ忍登レ、

〔太平記三十三〕公家武家榮枯易地事

都ニハ佐々木佐渡判官入道道譽ヲ始トシテ、在京ノ大名、衆ヲ結デ茶ノ會ヲ始メ、日々寄合活計ヲ盡ス、略中五番ノ頭人ハ、只今爲立タル鎧一縮ニ、鮫懸タル白太刀、柄鞘皆金ニテ打ク、ミタル刀ニ、虎ノ皮ノ火打袋ヲサゲ、一樣ニ是ヲ引ク、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衞門事

或時此青砥左衞門夜ニ入テ出仕シケルニ、イツモ燧袋ニ入テ持タル錢ヲ、十文取ハヅシテ、滑河ゾ落シ入タリケルヲ、略下

〔總見記一〕信長公元服初陣風俗事

信長ノ御形儀、甚以テ異相ナリ、不斷著シ給フ明衣（カタビラ）ノ兩袖ヲホツシニナサレ、半袴、燧袋、色々數多著サセラル、

〔細川家記十三忠興〕慶長八年四月廿一日、忠利君へ之御書、略中

一ひうち袋二ツ略中　一ひうち袋之とめ廿七遣候事略中

四月廿一日　御判